

徳泉寺報

No.0021

発行
令和元年 7月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区
榴岡 3-10-3

(022) 297-4248

公開同朋会

徳泉寺では毎月第二土曜日に親鸞聖人の教えを共に学んでいく同朋会という聞法会を行っています。七月は公開同朋会と称して広くご門徒さんに呼びかけて開催しています。梅雨の肌寒い日が続く中、一転してこの日の天気は晴れ。少し暑いくらいで本堂の窓を開けてお参りをしました。初めに「正信偈」、皆で声をあわせての勤行です。これは親鸞聖人の著書『教行信証』から本願寺八代住職の蓮如上人が、お勤めとして抜き出して節をつけたと言われています。その後、住職、前任職から三十分ずつくらいの法話があり、最後は会館でお茶を飲みながらお話しをしました。普段の同朋会よりテーブルの数も多く、お参りに来てくださった方同士でお話もはずみ、この会をご縁としてお知り合いになっていただけたようでも有難いことでした。



本堂で勤行(ごんぎょう)



法話(仏教のお話)



お茶っこ飲み

お焼香のし方



①仰ぎ見る



②焼香 2回



③合掌



④頭礼

*額におし頂かない

住職法話抜粋『お焼香とお念珠』
お焼香はもともとお釈迦様の説法を聞くときに焚いたと言われています。仏さまに出あう、亡き人に出あう、私たちのいのちに出あう。香を焚き、心を落ち着かせて大事なことに気づかせてもらうのでしょうか。



一輪の念珠

親玉と房が真下に来るように持つ



親玉を親指ではさみ房を左に



一輪の念珠

前任職法話抜粋『読経は誰のため』

以前「タマシイは天に昇り遺体は抜け殻になっているはずなのに、なぜ遺体に向かつて読経するのか」という質問を受けました。

『人は死ねばゴミになる』(伊東栄樹)という本に対して、鈴木章子さんは「それでは未完のまま、人間死ねば仏になる」と著書で応えています。ご遺体は抜け殻ではなく、その人の存在・生涯全体をかたどって私たちに歩むべき道を示してください。さる仏さまなのです。

お経は人生のたて糸と言われますが、仏陀(目覚めた人)の教えです。そこには都合のいいことも悪いことも自分の人生だと気づき、納得できる人生を歩んでほしいという願いがあります。

亡き方が何を残していかれたのか。いのちのボタンタッチを通して私たちが「残されたいのちを生ききっていきなさい」という仏の願いを聞かせていただくということではないでしょうか。